

# 交流

会報第8号  
2003年12月

発行責任者

シュワルツェネッカー竹本真砂子  
ブルン敦賀和子  
フリッチー長谷川雅子  
モジマン中西生子



スイス日本語教師の会

Verein der Japanisch-Lehrkräfte in der Schweiz  
Association des Enseignants de Japonais en Suisse  
www.kyoshi-kai.ch

## 日本語って、面白い

日本語を教えていて、その面白さや不思議さに気づくことはありませんか。

明海大学教授の水谷信子先生が、昨年3月から、アルクの『月間日本語』のサイト([www.alc.co.jp/jpn/](http://www.alc.co.jp/jpn/))に「日本語って面白い」というシリーズをお書きになっています。その第1回目と第7回目をここにご紹介します。これを読んで、皆さんも日ごろ何気なく使っている日本語について考え、その面白さを再発見してください。

このシリーズの転載に際しては、水谷信子先生と株式会社アルク日本語マルチリンガル教材編集部の村上充氏に、特別の許可を頂きました。本当に有難うございました。

### — 水谷信子先生のプロフィール —

日本語研究センター（現米加大学連合日本研究センター）教授、お茶の水女子大学文教育学部教授を経て現職。アルクの通信講座『日本語の教え方短期実践講座』監修。『日本語教育の内容と方法』『実例で学ぶ誤用分析の方法』（いずれもアルク）、『An Introduction to Modern Japanese』『Nihongo Notes Volume 1-10』（いずれも共著、ジャパントイムズ）など、著書多数。元日本語教育学会副会長であり、日本語教育の第一人者。

### 第1回「いいえ」

先日、勤務先の大学の女子大生が台湾へ遊びに行き、帰ってきました。日本語を学習中のむこうの女子学生たちと仲良しになり、食べ物、買い物、人気タレントのことなど、楽しく話し合うようになりましたが、その女子大生たちが、「いいえ、わからない」とか「いいえ、まだわたしは行ったことがない」などと、しきりに「いいえ」を使う。否定の答えに「いいえ」は当然だし、そう習ったんだろうとは思いますが、何だか違和感があるし、自分だったら「いいえ」とか「いやあ」とか「ううん」などはあまり使わないんじゃないかと感じたそうです。

そこで、自分と日本人の友達の気楽な会話を数時間録音して後で聞いてみると、「いいえ」の類はほとんどなかったそうです。「新しい丸ビル、行った？——まだ」「あの子、この前のコンサートで隣にすわった子じゃない？——さあ、わかんないけど、違うと思うな」のような具合だと、その女子大生は言っていました。

だいぶ前に、「Noと言えない日本人」ということが問題になったことがあります。それ

は、自分が賛成できないことははっきり否定する勇気を持つべきだという意味で言われたのだと思います。しかし、今回の「いいえ」の問題はそれとは違います。否定はするのですが、その表現としては「いいえ」の類を使わないということです。もちろん、誘いや依頼を断るときは「いいえ」の類を使わずに、「ちょっと都合があつて」とか「残念だけど」のような婉曲な表現を使うのは当然ですが、そうでなくて、前にそこへ行ったことがあるかというような事実関係の質問に否定の答えをする場合でも、実際に「いいえ」の類をあまり使っていないということです。

試しに今日1日、自分が「いいえ」の類を何回使ったか、相手から聞いたか、思い出してみてください。あるいはこれから人とのやり取りに注意して聞いてください。テレビ番組などでも結構です。「いいえ」の類が非常に少ないことがわかると思います。

なぜ、「いいえ」の類を避けるのでしょうか。「新しい丸ビル、行った？——いや、行ってない」という応答と、「新しい丸ビル、行った？——まだ」では、どう印象が違うか。「明日行きますか——いいえ、行きません」

と、「明日行きますか——行ってもいいけど、やはりやめます」では、どう違うか。

「いいえ」の類には、強い断定の響きがあって、会話の進行を打ち切ってしまうような印象があるためではないでしょうか。Yes, No がはっきりしていると言われる英語でも、No. 以外に、Not quite./Not in particular./I'm afraid not./I hope not.などの表現があって、必ずしもいつも No. だけで通しているわけではありません。人間どうしの会話には打ち切りをきらう気持ちが働くのではないかと思います。特に日本語にはその傾向が強い、だが、日本語の話し手自身はそれに気づいていないのだと、日本語を外国人にむかってわかってもらうことを仕事にしてきた立場から、私は感じています。

## 第7回 強盗は二人組

物騒な世の中で犯罪が絶えません、テレビのニュースで「強盗は二人組」などと報じているのをときどき聞きます。強盗は二人だったのですが、「ふたりぐみ」でしょうか「ににんぐみ」でしょうか。最近では、「ににん」が多いようです。

日本語の助数詞はめんどろで学習者泣かせですが、最近ではどんどん簡略化されています。二、三十年前まではもっともっと複雑でした。助数詞に対する感覚の点では古い世代と若い世代の間にはかなりの違いが見られます。たとえば古くは「たんすひと棹」「琴いち面」などの数え方がありましたが、今はもう使う人が少なくなりました。「ひとつ、ふたつ」でも間に合いますし、若い人は何でも「いっこ、にこ」と個ですませてしまう傾向があります。最近では「あの人は学年がわたしよりいっこ上だ」というような言い方も聞きます。

スーパーなどで「大根は一個100円」などという言い方を聞きます。えっ、大根は一本じゃないのと思って見ると、昔は長い棒の形をしていた大根が今では二つに短く切られてプラスチックのトレーにくくりつけられている。こう短いとどうも一本じゃなくて一個だと納得してしまいます。まぐろのさしみなども昔は船の形の入れ物に入れてあったので、「さしみひと船」でしたが、いまは入れ物から行って一個のほうがよさそうです。

入れ物といえば、居住空間に関係する助数詞も変わってきました。以前は部屋を「間」と数え、「ひとま、ふたま、みま、よま、い

つま」と言いました。「いつま」くらいまでがよく使われ「むま、ななま」などはあまり使いませんでした。それ以上の部屋数を言うときは「室」を使いました。助数詞は一般に少ない数についてはやまとことば系、多くなると漢語系という傾向を持っていますが、その切り替えが変わってきたようです。今でも「当時はアパートひとまぐらしで」などという言い方は残っていますが、だんだん小さい数にも「室」が進出して「三室、四室」と言い、ときには「一室、二室」さえ使われるようになってきました。「間」にはたたみの部屋の連想が強いので、住宅の洋風化が進んだ現在では「間」より「室」のほうがふさわしくなっているのだらうと思われま

す。大根やさしみや部屋の場合、いわば数える対象の形が変わってきているので、助数詞もそれにつれて変わってきたと言えますが、それとは別に漢語形の助数詞が優勢になったという傾向があります。たとえば方法を数える「通り」という助数詞は、駅へ行く道は「ひととおり、ふたとおり」などと言いますが、三になると「みとおり」を使う人は少なく、「さんとおり」が強くなっています。最初にあげた強盗の場合も「ふたり」が「ににん」になったことは漢語系が優勢になっている傾向を示しています。字を見て漢語としてとらえるかやまとことばとしてとらえるかという感じ方が変わってきたのでしょう。

\*\*\*\*\*

株式会社アルクのホームページでは、水谷先生の「日本語の教え方 相談室」もスタートしています。

<http://www.alc.co.jp/jpn/teacher/soudan/index.html>



## ヨーロッパ日本語教育シンポジウム - 日本語教師の交流の場

9月にベルン大学で開催された第8回ヨーロッパ日本語教育シンポジウムは、世界各国から約200名の参加者を迎え、3日間という日程が短く感じられるほど、充実した、中身のぎっしり詰まった、そして常になごやかな大会となりました。

大使館でのレセプション、立食パーティー、懇親会、そして休憩時に、そこかしこで旧交を暖めあったり、新しい出会いに話が弾んだりしている光景は、まさにシンポジウムが世界の日本語教師の「交流」の場として重要であることを認識させました。詳しい講義の内容については、シンポの報告書におまかせすることにして、今回の「交流」では、報告書に掲載されないシンポの「こぼれ話」を集めてみました。参加された会員の方々の心の中には、きっとそれぞれのシンポのこぼれ話があるかと思えます。全員の方にお話を伺いたいところでしたが、代表してシンポジウム実行委員の方々にお願いしました。時間をさいてお話を聞かせてくださった実行委員の皆様、御協力ありがとうございました。そして、このようなすばらしいシンポジウムをスイスで体験することができたのも、実行委員の方々をはじめ、各方面で大活躍のボランティアの皆様やお手伝いをしてくださったスイス会員の皆様のおかげです。この場をお借りして心からお礼を申し上げたいと思います。

### 日本語教育シンポジウムの裏話

今年9月に開催されましたシンポジウムでのいろいろな苦労話やちょっとした裏話を皆さんに聞いてみました。肩のこらない記事として読んでみて下さい。

#### S.S さんの話

2001年9月にまず実行委員が選定され、テーマ選びから活動は始まりました。スイスらしいテーマということで「多言語文化」に決定し、私達は多言語文化を身をもって体験されている在スイスの先生に講演をお願いすることにしました。また、鈴木先生は2002年夏に講演を了承してくださり、Roosさんが秋に先生に日本でお会いしました。

研究発表はキャリアアップのためか人気があり、39件の申し込みがありました。前年まで3件同時発表だったのを、今回は4件に増やすことにしました。そして昨年の発表者や同じ内容が重なってしまったなど、採用されなかった場合もその理由を連絡しました。

皆お金集めに慣れていないためスポンサー探しがとても大変でした。色々な企業にダイレクトメールを送ってスポンサーを募ったものの、返事が返ってきたのは少しだけでした。そこで商工会議所に協力をお願いするなどの対策を取りました。スポンサーの方々には、直接的な援助をくださった企業や個人の方々もいましたし、割引や物品で援助をくださった方もいました。

開会式で実行委員紹介のとき、会長がいなかったのは、上の階で講師の方達を和気あいあいとお互いに紹介していたため、時間を確認するのを忘れてしまったからです。3分遅れて、皆さんにあとで怒られました。

当日、研究発表の開始直前に部屋の交換がありました。発表で使うビデオがしまっているキャビネットのドアが開かないので取り出せない、というのが理由でしたが、後でよく見てみると、ドアは簡単に開きました。どうも発表者も役員もあせって、興奮していたようです。

シンポジウム後の月曜日に、鈴木先生、加藤先生、江戸カルチャーセンター日本語学校理事長の中澤さんと4人で、レンタカーでエメンタールへ行きました。昼食はチーズのもり合わせをいただきました。そして加藤先生はドイツ行きの電車でぎりぎり飛び乗り、乗ったとたんドアが後ろでしまって、間に合いました。

#### Y.R さんの話

2003年ベルン・シンポ 準備段階で大変だったけど楽しかったこと

・スイスで開くシンポジウムに適したメインテーマを考えて、標題としてまとめるが大変でした。初めから「複数言語使用環境の中での日本語教育」という構想はありましたが、みんなが頭の中で漠然と持っているイメージを絞り込んで、シンポに参加する人たちに具体的な意味が明確に伝わるように、ぴったり合う言葉を探すのが難しかったです。「マル

チリングリズム」という、色々な意味に取れる題にしましたが、結果的にはシンポの内容を考える時に広範囲な話が取り込めてよかったです。2002年の秋から冬にかけて、このために実行委員たちが意見を書き合ったメールが何十通と飛び交っていました。

- ・とにかく資金不足だったから、経費と時間を節約するため、会議を頻繁にできず、みんなで話し合う機会が少ない分、全ての問題について自分の考えをまとめてメールに書いて全員に送り協議しなければならず、そのために多大な労力と時間を費やしました。

- ・準備期間中に実行委員 9 人の間でやり取りされたメール数は膨大なものでした。私はたいてい夕方から夜にかけて授業があり、帰宅してメールをあけるとドサッと入ってきており、その返事書きで夜中の 2 時ごろまでかかることが多かったです。メールは便利でしたが、書く負担は非常に大きかったです。

- ・準備期間中には、思いがけない問題が出てきて、解決法がなかなか見つからず、まるで泥沼に入り込んであがいているような時がありましたし、仕事が一つ片付いてヤレヤレと思ったら、すぐに次の問題が起きてきて、いつまでも抜け出せず、まるで果てしないぬかるみ道を歩いている感じがすることもありました。それで、委員仲間の間では仕事の難易度に応じて「底なし沼、泥沼、ぬかるみ、水溜り」と言う言葉が流行っていました。

- ・基調講演の講師に、私が前々から著書を読んで興味を持っていた、言語社会学者の鈴木孝夫先生を迎えられたことが、非常に嬉しかったです。

- ・講師の先生方の専門分野を考え、そこから今回のシンポのテーマに沿った講演やワークショップをしていただくために、各先生からどのようなお話を引き出せばよいかを考え、何度もメールでこちら側が聞きたい内容を提案したり、先生側の要望を受け入れたりしながら、しだいに講演やワークショップの内容を具体化していきました。

このときもメール書きの仕事が大変でしたが、その過程を辿りながら、私自身にも徐々にシンポジウムの形が見えてきて、このような大会を企画する楽しさが味わえました。

- ・9 人の実行委員が自分の得意分野を受け持って、適材適所で仕事のできたのが、成功の秘訣だったと思います。

#### A.N さんの話

今年の 7 月に実行委員のメンバーの一人のお父さんが亡くなられ、急きょ日本へ帰国され、またもう一人のメンバーの義理のお母さんの調子が悪くなってしまいました。そのメンバーの方の活動を、他の実行委員のメンバーが分担し補い合いながら、危機を乗り切りました。これがあったことでより一層、シンポジウムをうまく運ぶことができたと思います。また離れていても E-mail があるので、お互いの連絡にとっても役立ちました。

準備段階や大会前日、そして大会当日会長の息子さんお二人には大変お世話になりました。彼らは名簿作成を引き受けてくれ、大会前夜遅くまでベルン大会会場の 6 教室へのインターネットやマイクなどの配線をすべて担当してくれました。機械に強い息子さんに「感謝」です。当日の運転手もかってでくれ、大活躍でした。

またチューリヒ大学東洋学部の学生の方々が、ボランティアで休憩時のお茶やお菓子の準備をしてくれ、そしてそれがいつもきちっと用意されていてすぐに休憩に入ることが出来、大変有難かったです。

二宮先生と鈴木先生の討論会やパネルディスカッションがあれば面白いのに、と考えられた人も多かったようです。実際、二宮先生は、「もしそんな機会があったらいいだね」とおっしゃっていました。

ヨーロッパ日本語教師会の方々から、「会場の場所が最高だった」「天気がとても良かった」「雰囲気は初日からよかった」等の感想が送られてきました。またラインフリード先生もシンポジウムの 3 週間前に開かれた共同セミナーと比べても、規模、組織力ともしっかりしていて、とてもよかったとおっしゃってくださいました。

#### C.M さんの話

研究発表に関しては、採用するかどうかの選択が難しく、前年に発表した人には遠慮してもらい、内容が偏らないように配慮しました。去年までは、日本に住んでいる学生さんにもたくさん発表してもらいましたが、今年よりヨーロッパ教師の会か、スイス教師の会の会員のみならず、どうしても発表したい人には、会員になってもらうことにしました。

ユースホステルはホテルと違うので、現場に行っても確かめないとはいっきりしないことも多く、こちらで用意していた部屋割り通りに

入れない人が出てしまいました。受付に事情を確かめに行ったところ、偶然にも大学時代の友人が泊まっていて、彼女のおかげで、部屋の割り当てがすぐに判り、とても助かりました(彼女の参加は知っていましたが、長い間会っていなかったの、とてもうれしく、友人は有難い存在だと思いました)。

実行委員として、一年以上前から活動してきましたが、E-mail の洪水にはずっと悩まされました。返信にも時間がかかり大変でしたが、おもしろいメール語録がたくさんでき、離れていてもお互いの交流に役立ちました。(例えば、泥沼=問題解決が進んでいない、鬼のかく乱=病気になった、など)

#### K.F さんの話

私はフルタイムで仕事をしているため、「航空券の担当」という独立した仕事をもらいました。講師の先生は高齢(75 歳)なので、ビジネスクラスを希望されましたが、予算からはエコノミー分しか出ず、非常に困りました。全日空の所長が親友なので相談したところ、ビジネスクラスのチケットをかなり値引きしてくれました。

加藤先生とは、日本で学芸大学を訪問した時にお会いしました。大学の案内など、逆いろいろなもてなして頂き、とてもうれしかったです。

またこのシンポジウムでは、いろいろ体験できて、とても楽しく、「もつべきものは、親友!」と実感しました。

#### 飲食担当の方の話

みなさんが飲んだコーヒー・紅茶用のお湯は、大学清掃具置き場から汲んだものでした。

休憩用の飲み物に、あまり大勢の人が集中しなかったのは、他の店があったために分散してしまったからです。でも、量的にはきち

\*\*\*\*\*

シンポジウムの研究発表にも参加されたカイザー青木睦子さんが、スイスで子育てをしている多くの方が直面する問題、「海外で学ぶ子どもたちの日本語」というテーマで原稿をお寄せくださいました。

### 海外で学ぶ子どもたちの日本語

カイザー青木睦子

国際化にともなって、海外赴任の家庭が増えていきます。家庭で話すことばと社会一般で使われることばが異なる環境の子供たちは、母

と計算して出しました。上階に上るのが面倒に思った人もいたかも知れません。

ケータリングに初日の夕食を注文するときは、予算に合わせると半量の値段になってしまうので、果たしてその量で足りるかどうか、とても不安でした。でも、結果的にはいづらか残ったので、ほっとしました。

#### 他国からの参加者の感想など

オランダからのある参加者は、「スイスのシンポジウムは時間に正確で、きちっとしている。以前住んでいたイタリアでは、研究発表や、講演の時間が延びても、のんびりしたもので、誰も気にしない」と言っていました。スイスに住んでいる間に、私達も、ヨーロッパで一番鉄道が遅れない国の影響を受けているようです。シンポジウムでも各国の性格が表れていておもしろいですね。

アイルランドからの参加者らが、スイスの食事はおいしいとの感想を残してくれました。スイスのおみやげには、くまのビスケット、生チョコ、クノールの固形ブイヨン、ミグロの板チョコ 30 枚などが選ばれていました。滞在期間は、皆さんそれぞれで、開催の前日にベルンに着いて、月曜日までという方や、日本から来た方で、ツェルマットへ観光に行く、続けて仕事でアフリカ、ドイツへ行くという参加者の方もいました。これからベルンに住んでいる知人に会うという方もいて、シンポジウム+αという参加者の皆さんも多かったようです。



語(幼い時に自然に身に付けた、子供にとってはじめてのことば)に加え、新しいことばを高度に習得できる良い機会にめぐまれています。また一方では、国際結婚家庭に生まれる、いわゆる「ハーフ」の子供たちも増えてきています。二つの異なるルーツが結ばれて誕生した子供たちは、双方の親の文化に自然な形で接触できる有利な環境にいます。生まれ

育つその国の言葉だけでなく、もう片方の親の文化とその言葉を高いレベルで身につけてほしいと、どの親も願うことでしょう。

国際化にともなって、もはや「国際語」とみなされる英語はもちろん、どの言語の習得も肯定的に評価されるようになった今、バイリンガル教育への関心がさらに高まっています。そして、実際に子供に言葉を教える保護者の方々も増えてきています。異なる文化を理解し、言語を習得し、柔軟かつ流暢に場面に応じて表現を使い分けられることがバイリンガルの理想ですが、親が単独でそうした子供を育てるのは容易なことではありませんし、週に何時間かの日本語教育を受けていても、いろいろな疑問や問題がでてきます。

バイリンガルのテーマは多岐にわたり、さまざまな角度から考えなければならない分野があるのですが、ここではこのテーマをもっと身近なところからとらえて、異国の地に住み、これからお子さん、またはお孫さんなどに日本語を残していきたいと考えていらっしゃる皆さんと「子供の日本語」というテーマで考えてみたいと思います。

はじめに、学習児童のニーズを明確にするために、海外で長期にわたって日本語を学ぶ子供たちのタイプをいくつかのグループに分けてみましょう。

(1) 親の海外赴任のため、外国で生活をしながら全日制の日本語学校に通って教育をうける「海外在住子女型」

(2) 親の移住や海外赴任などを契機として、現地の言葉で学校教育を受けながら補習校などで一週間に何時間か日本語を学ぶ「移住児童型」

(3) 片親が日本人で、現地語で学校教育を受けながら、補習校や日本語教室で週に何時間か日本語を学ぶ「国際結婚子息型」

(4) 海外移住者の3世、4世など日本語を外国語として学ぶ「日系人子弟型」

(5) 第二、第三外国語として日本語をゼロから習う「外国人子弟型」

以上のとおり、大まかにわけて5タイプがあります。

(1)の海外在住子女型では、**母国語としての国語教育**、(2)の移住児童型では、**母語である日本語を保持しさらにのぼしていく日本語教育**、(3)の国際結婚子息型では、片親との会話で覚えた「**半母語**」を**のぼす日本語教育**。(4)の日系子弟型、(5)の外国人子弟型では、**外国語として学ぶ日本語教育**とそれぞれ学習目標が異なります。

子供に教える日本語と聞くと、自分がうけた国語教育を思い浮かべる方がほとんどだと思います。ところが上の例であげたように、

生活言語が日本語以外の環境で育つ子供たちの日本語教育は、学習内容が国語教育とは似て非なるものなのです。ここでは、分野を限定し、(2)と(3)のタイプである、「**現地のことばで生活をしながら、母語である日本語を保持し、その言語能力をさらに伸ばしていく日本語教育**」をテーマに話を進めたいと思います。

二つの言語を同時に学習していく子供たちの日本語教育は、バイリンガル教育と重なる部分がたくさんあります。バイリンガルを育てるノウハウはいろいろな本や記事に書かれており、それらの方法を目にした方もたくさんおられることでしょう。しかし、ひとくちに「バイリンガル」といっても、言語能力、成長過程、学習環境などの要因によってさまざまなタイプがあるので、それらの背景をふまえて考えることが必要となります。はじめに、ここで対象となる子供たちのバイリンガルとは何かを考えてみましょう。

まず、「バイリンガル」ということばですが、これは「**2つのことばを高度なレベルで使える人**」と「**2つのことばを高度なレベルで使える状態**」のふたとおりの意味で使われます。一方、高度な言語習得のレベルとはいえ、いったいどの程度まで発達した言語をバイリンガルと呼ぶのか、統一した基準がないため定義しにくいことばでもあります。ここでは、もう少し詳しく「**学校教育を受ける現地のことばが第一言語として十分に発達し、それに加えて親のことば(日本語)も、聞く、話す、読む、書くの4技能がバランスよく高レベルに発達したバイリンガル**」を私たちの子供の理想のバイリンガル像と定義しておきましょう。

バイリンガルを言語の到達レベルで分類すると、1. 二つの言語が年齢相応に高度に発達している、バランスのとれたバイリンガル 2. 一つの言語は年齢相応に高度に発達しているが、もう一つの言語は明らかに弱い偏重バイリンガル 3. どちらの言語も年齢相応に発達していないセミリンガルと、三つのグループに分けることができます。親が望むバイリンガルはもちろん、1番のバランスバイリンガルですが、残念なことに、子供が現地で学校教育を受けだすと、現地のことばが伸びると同時に日本語力は弱まっていく傾向があります。これは日本語への接触時間が少なくなるためで、よほど意図的な日本語支援がないと、日本語を保持するのが難しくなります。二つのことばがバランスよく発達したバランスバイリンガルは、どちらのことばにも同じくらいの長さで接触できる環境が必要だといわれます。ですから、私たちが対象とする

バイリンガル児童は、全日制の日本語学校で教育をうけるのではない限り、上記2番の偏重バイリンガルになるのが普通です。バイリンガルと聞くと、二つ以上のことばが母国語として発達している状態を想像する人がほとんどかと思いますが、実際には現地語が強く、日本語が弱い上記2番の偏重バイリンガルもたくさんいるわけです。私たちの教える子供たちは、日本語が弱い言語であること、そのためにさらなる日本語支援が大切なことを認識しておく必要があります。

つぎに、バイリンガルを言語能力から分類してみましょう。日本語を、1. 聞いて分かるけれど話せない、または話さない聴解型バイリンガル、2. 聞いて話せる会話型バイリンガル、3. 聞いて話せて、読んで書ける、読み書き型バイリンガルなどのタイプがあります。日本語はなにより表記が難しいことです。週に何時間かの日本語学習で、どこまで読み書きが習得できるのか難しい問題ですが、弱い言語でも「聞く」「話す」「読む」「書く」ことができる、高度なバイリンガル（バイリテラル=biliteral）を目標に学習をすすめていきたいものです。二つの文化と言語を背景とする子どもたちの学習過程はさまざまです。何もしなければ衰退してしまう日本語をいかに伸ばしていくかを課題に、楽しい雰囲気の中で、日本語を伸ばす手伝いができたらと思います。

次に、バイリンガル教育をするうえで大切な点について簡単に触れておきます。

まずは二つのことばをきちんと使い分ける環境を親がつくることです。自然に任せて会話をしていると、子供はどうしても楽なことばを使う傾向があり、二つの言語のことばを混ぜて話すようになります。どの場所で、どの人と、などTPOに応じて、いつどこでどのことばを使うかを理解させ、習慣化させることが大切です。日本語に接する時間は多ければ多いほどいいわけですから、日本語で話せる貴重な時間に、子供が現地語で返事を返すのは残念なことです。子供が二つのことばを混ぜて話すようになったり、現地語で返事を返すようになったら、早いうちに使い分けの習慣をとりもどすようにしましょう。

また、両親の双方のことばに対する、肯定的な態度も子供にとって大切な点です。どちらかの親が、弱いことば（ここでは日本語）をないがしろにするような態度をとると、敏感な子供はそれに応じて学習意欲を失ったりします。両親が事前にバイリンガルについて話し合い、共通の目標意識をもつことが大切です。

日本語の接触時間を長くする工夫としては、本の読み聞かせや、お話のカセットやビデオがありますが、日本語を話す親との直接のふ

れあい、子供にとって特別な言語接触であり、より質の高い日本語交流を楽しむことができます。ですから、子供が小さいうちから本を読み聞かせる習慣をつくり、時間を気にせず、リラックスした状態で子供と話せる会話の時間を作ることも大切です。

また、文章を声に出して読む「音読」は、ことばを覚えるのに適した学習方法だと言われています。なるべく機会を作って、教科書を大きな声で何度も読ませるように心がけましょう。

日本に里帰りをしたり、日本から両親や親戚をよぶことは子供の日本語の成長を助けますし、補習校や日本語学校で同じことばを習う子供たちに会うのはいい学習動機になります。強制でない、自然で楽しい日本語接触を目標に、それらの環境を意図的に用意してあげることができれば理想的です。

冒頭でも記しましたが、日本語を保持し、さらに伸ばしていく学習は、国語教育とは同じではありません。日本人生徒が9年かけて習得する漢字の学習を、週に何時間かの日本語の授業でこなしていくのは当然無理があります。常に日本語のシャワーを浴びている日本の子供たちと、日本語接触が限られた子供たちとは、学習語彙や表現もおのずから違ってきます。日本語を母国語とする生徒と学習到達目標を同じにはできないのです。この分野の教材は非常に不足しており、バイリンガル児童のニーズに応じた新しい教材が必要とされています。現在、私自身も教え子たちの笑顔を思い出しながら教材開発に力を注いでいる状態です。それらの子供たちがこれから日本と世界の掛け橋になってくれること、そしてまたもっともっと多くの子供たちが日本語を学ぶ機会に恵まれますよう、心から願っています。



## 本の紹介

『井上ひさしの日本語相談』 井上ひさし著  
朝日新聞社

「米」が「コメ」と書かれる理由は？  
固い、堅い、硬いはどう違うのか？

普段日本語を意識していると、いろいろな疑問が浮かんできます。この本の中に出てくる上記の2つの項目も、そうです。また、生徒に質問されて初めて、考える場合もあるで

しょう。そんなときには、この一冊が「日本語相談」に乗ってくれるかも知れません。

『犬は「びよ」と鳴いていた』日本語は擬音語・擬態語が面白い

山口仲身著 光文社新書

「イガイガ、コホロ、カカ、ツブリ」

これらみな、昔使われた擬音語です。いったい何の音だと思いますか？答えは、順に、「赤子の泣き声」、「鞍櫃の蓋が少し開く音」、「化け物の高笑いの声」、「水の中に飛び込む音」です。

日本語の擬音語・擬態語の移り変わりについての謎を解き明かしてくれるのが、この本です。

会長からのセミナーのお知らせ

### 2004年スイス日本語教師の会 春のセミナー

講師： 加藤清方教授 東京学芸大学  
林 明子助教授 東京学芸大学  
場所： ベルン大使館文化センター  
日時： 2004年3月27日（土）・28日（日）

## 編集後記

今号を最後に、3年間会報の編集委員として活躍されたブルン和子さんが会報作成から退くことになりました。3年間どうもありがとうございました。

前年までの編集委員のカイザー睦子さんの後任として、シュワルツェネッガー真砂子さんが今年から精力的に仕事をしています。カイザーさん、本当にお疲れ様でした。シュワルツェネッガーさん、どうぞよろしくお願ひします。

Brun-Tsuruga Kazuko Tel: 01/837 0224	Herrenweg 7, 8303 Bassersdorf Fax: 01/837 0218 E-Mail: <a href="mailto:kazuko.brun@bluewin.ch">kazuko.brun@bluewin.ch</a>
Fritschi-Hasegawa Masako Tel: 062/842 6605	Feldmattenweg 2, 5722 Gränichen Fax: 062/842 6605 E-Mail: <a href="mailto:ursfri@bluewin.ch">ursfri@bluewin.ch</a>
Mosimann-Nakanishi Ikuko Tel: 01/955 0094	Stadacherstrasse 51, 8320 Fehraltorf Fax: 01 995 6135 E-Mail: <a href="mailto:mosimann@asiaintensiv.ch">mosimann@asiaintensiv.ch</a>
Schwarzenegger-Takemoto Masako Tel: 01/361 7340	Turnerstr. 8, 8006 Zürich E-Mail: <a href="mailto:civediamo@yahoo.co.jp">civediamo@yahoo.co.jp</a>

## ヨーロッパ内での教材調達の可能性

先のベルンでのシンポジウム会場で宣伝販売をしていた Japan Books London（日本出版貿易）からの情報です。 当会での一括購入図書の時期から外れて、急に教材が必要になった場合などには便利そうです。急がない場合は、凡人社の一括購入のほうが安いです。ただし、購入時のレートによって、多少値段が上下します。

スイスでのシンポをご縁に是非とも定期的にご注文をいただきたいので、「スイス日本語教師の会」会員からの注文に限り特別定価を設定いたします。送料が実費で発生しますが、テキスト注文は1冊でも大量でも英国内の各大学へと同じ低価格の売価を適用します。具体的には以下の通りです。

書名	英ポンド	ユーロ約	CHF 約
みんなの日本語初級 I & II 本冊	各 15.00	20.00	30.00
みんなの日本語初級 I & II 翻訳・文法解説各国語版(英、仏、独)	各 11.00	15.00	
みんなの日本語初級 I 翻訳・文法解説 (英語訳・ローマ字版)	11.00	15.00	22.00
みんなの日本語 初級 I 標準問題集	8.00	11.00	
中級の日本語 (ジャパントイムズ)	23.00	31.00	46.00
Japanese for Busy People I	15.00	20.00	30.00
Basic kanji Book vol.1	17.00	23.00	34.00
Basic kanji Book vol.2 (S F 約、ユーロ約)	18.00	24.00	36.00
Japanese for everyone (S F 約、ユーロ約)	18.00	24.00	36.00
「げんき 1 & 2	各 24.00	33.00	48.00

みんなの日本語本冊と文法解説書と標準問題集を1セットとすると、送料は£7.00 (約 9.00 ユーロ)。送料は注文セット数によって変わりますが、書籍小包は重量制限が 5 k g までで、3セットで £20.00 (約 27.00 ユーロ) がおおよその目安となります。

支払い方法は、学校からの正式注文であれば、学校の注文書を送付いただければ、ユーロ建ての請求書を添付して発送が出来ます (後日銀行振込のみ受付)。その他のケースであればクレジットカードの番号を事前に知らせ、英ポンドで引き落とすメールオーダーとなります。在庫は十分にあるので、正式発注が届いた日より1週間位で届けられます。クレジットカード使用には手数料が発生しませんが、英ポンド金額でしかメールオーダーが出来ないため、実際に引き落とされる金額は自国の通貨での支払いになり、カード会社のその時のマーケットレートが適応されます。

学生が直接注文する場合の値段は教師会会員より少し高くなります。例えば、「みんなの日本語初級 I 本冊」は英ポンド 17.99 (約 24.50 ユーロ)、  
「みんなの日本語初級 I 翻訳・文法解説英語版」は英ポンド 13.99 (約 19 ユーロ) に送料が加算されます。

もっと詳しい情報は直接 [jp-books london@lineone.net](mailto:jp-books london@lineone.net) に問い合わせてください。

### 一括図書についてのお知らせ

凡人社の一括図書の注文は原則として年2回、締切りは6月と12月の第1週目の土曜日です。申し込み用紙、詳細は会のホームページから入手可能です。インターネットが使われない方は、係の Clénin まで、ご連絡下さい。申し込み用紙を郵送します。

